異世界に転生する話

ＫＹＯ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界に転生する話

【Ｎコード】
Ｎ６８５２Ｓ

【作者名】
ＫＹＯ

【あらすじ】
神様転生ＴＳ異世界チートテンプレ話。

※思いつきと勢いで書いているので飽きたら速攻で打ち切りになります。

第1話（前書き）

なんか好き勝手書きたくなったので書き始めました。
息抜きとか何となくで書いてるので簡単に更新停止します。ご注意ください。

第1話

「やあ、賢治君」
「は？正人おじさん？」

ある日、突っ込んできた大型トラックの回避に失敗して俺は死んでしまった。そこまではまあ納得・・・出来るって訳ではないが、仕方ない事だと今は納得しておこうと思う。
それでテンプレと言うべきか、トラックを見た時に考えた「あ、神様転生フラグだ」というのが現実になったのか、俺は気が付けば小さな事務所の様な部屋に居た。
ここまで来たらテンプレだとすぐに確信出来たので俺は神の姿を探したんだが、年老いた爺さんも幼女も見当たらない。代わりにそこに居たのは、先月にテクノブレイクで死んだと思われる正人おじさんだった。

正人おじさんは親戚の中でも疎まれていたうだつの上がらないおじさんで、金無い嫁無いスキルも無ければ覇気も無いという無い無い尽くしのおじさんだ。
４１歳の年齢でリストラされてしまい無職になり、それからは引き篭もりの様に外へ出なくなったらしく、リストラの数日後にテクノブレイクで死んだらしい。普段からアニメやエロゲに嵌っていた事もあり、親族の恥と認定されている。
俺はそんなおじさんと交流のあった数少ない人間だ。オタク趣味に偏見を持たず、というかむしろ俺もどちらかといえばオタクだからそれに関しては問題は無かった。
交流といっても時々メールするくらいだったが、どうやらおじさんには友人も全然居なかった様でメールフォルダには俺のメールしか無かったらしい。悲惨な人生だ・・・

「なんでおじさんがテンプレ展開に登場する神みたいな立場に居るの？」
「それはね、僕が転生担当の神様になったからだよ」
「は？」

正人おじさんはどうやら４０歳超えまで童貞で居たおかげで、魔法使いを超え神へと至ったんだという。思わずそんな馬鹿なと呟いてしまったものの、事実目の前に居るのだから認めるしかない。
しかし神はすでに飽和状態。役職も空いておらず、しかし新しい神、しかも前人未到の方法で神格化し強い力を手に入れた神に役職を与えない訳にもいかない。
そんな訳で『特定の方法で死んだ人間に能力を与え、下位次元の世界に転生させる』という転生担当を与えられたらしい。下位世界は無限に増え続ける世界なのでチート転生者のせいで少し壊れてしまっても問題が無いからどうでもいいと言うのが神族の認識らしい。

「そんなに強い力と役職なのに、こんなに小さい事務所なの？」
「ほら、神になった方法が方法だから、他の神からは蔑視されててね・・・まあ、人間だった頃からだから慣れてるけどね」

死んでも虐げられる正人おじさんに思わず涙が出そうになってしまった。
それはさておき、俺は正直異世界に転生はする気にならない。ああいうのは見たり読んだりして楽しむから良いのであって、実際にそうなるのは少し違うのだ。
なので断ろうとしたんだが・・・

「あの、俺は」
「実は賢治君が初めて転生させる人でね。ようやく仕事が出来る上

に記念すべき初めての人が生前世話になった君だって事で、君には悪いけどかなり嬉しかったんだ」
「あのですね」
「今までは転生する人が来なかったから他の神からは気持ち悪い上に働かないとか陰口叩かれててね・・・これでようやく僕も本格的に神の末席として活動出来るんだ。さあ、願いを言ってごらん。転生第一号だから何でもサービスするよ！」

物凄く嬉しそうにそういう正人おじさんを見てると断れなかった。仕方が無い・・・どんな世界に転生するかわからないけど、絶対に安全に過ごせる様な能力を貰ってのんびり過ごす事にしよう。
とはいえ、どんな能力を貰えばなんでも出来る様になるんだろうか・・・あー、もういっそ何でも出来る様にしてもらえばいいか。

「何でも出来る様になりたいです」
「いいよ」
「いいの！？」
「これは数少ない自慢だけど、純粋な神の力なら創造神に次ぐレベルらしいんだ。それ以外は大した事無いんだけどね」

４０歳まで童貞だとそんなに凄い力になるのか・・・いや、テクノブレイクで死んだのが大きいのか？どちらにしろ世界はおかしいんだと悟ってしまいそうな事実だ。
正人おじさんが「そーれ」と軽く右手の指を振ると、俺の体が一瞬だけキラキラと輝いてすぐに消えた。これで転生すると何でも出来る神的なパワーが使える様になっているらしい。

「他に何かあるかい？来世の容姿とか、身分とか、何でも弄れるよ。転生先に関しては細かい指定は出来ないけれどね」
「そうなんだ・・・じゃあ記憶保持だけお願い」

「他は指定しなくていいのかい？」
「せっかく転生するんだから、出来るだけそのまま転生した方が世界に馴染めそうだからね」
「そうか。そうだね」

再びキラキラと俺の体が輝いて、そして光が消えた。これで転生しても記憶は無くならないのだろう。これで準備は完了の筈だ。
すると背後にあった扉の鍵が開く音が聞こえた。振り返ると扉が自動的に開いていき、その奥には暗闇が広がっていた。

「あの中に入っていけば転生出来るよ」
「わかった。頑張ってね、正人おじさん」
「うん、まあ、頑張るよ。それじゃあね」

そして俺は扉の前で正人おじさんに向かって手を振り、闇の中へと飛び込んだ。

ふわふわと曖昧な意識の中、誰かの会話が、まるで水の中で聞いている様に聞こえてきている。
目を開いても視界ははっきりしておらず、理解出来るのは何かに優しく包まれているという事だけ。光と共に人型の何かが見えているという事は、恐らく両親のどちらかが俺を抱いているのだろう。
まどろみの中を漂う意識を僅かに研ぎ澄ませながら、聞こえてくる会話に集中する。

『――』
『――』

日本語でも英語でも無い、聞いた事が無い様な言語だという事だけが理解出来た。どうやら地球の平行世界みたいなものでは無い可能性が高いみたいだ。ただ知らない言語の可能性もあるが。
会話をしているのは男性と女性の様なので、恐らくこの二人が両親だろう。会話の内容がわからないし顔もまともに視認出来ないが、何となく声から優しそうな印象を受ける。
これなら望まれず生まれた子供という訳では無いだろう。それならば裕福でも貧乏でもそれなりに幸せな人生を歩む事が出来そうだ。

『ーーーレフィア。レフィア』
『レフィアーーー。ーーーレフィア、ーーー』

レフィア、という言葉が何度も聞こえる。かろうじて見える二人の顔の様なものがまるで俺の顔を覗き込む様にしているので、きっとレフィアというのは今の俺の名前なのだろう。
レフィア・・・男か女かわからない名前だ。でも何となく女の様な気がするのは、俺が女としてこの世に生まれた証拠なんだろうか。
とか言っておきながら男だったら恥ずかしいので断言はしないで置こう。せっかくの転生なんだ、性別が変わったかどうかも楽しみにしておきたい。

ともかく今はーーーとりあえず眠ろう。

『ーーー』
『ーーー』

理解の出来ない言語を子守唄にしながら、俺は眠りについた。

第2話（前書き）

幼児時代で停止する可能性もあります。

第2話

転生してこの世界に誕生してから数ヶ月、ようやくある程度五感がはっきりしてきたおかげで色々と判明した事があった。

俺の名前はレフィア・ミーストレリアというらしい。母親はミナという名前で、年齢はまだわからないものの若くて綺麗な女性だ。そして父親はゲイルという名前で、こちらはワイルドな感じのする筋肉質な渋いおじさまだった。

どうやら外見通りの歳の差結婚だったらしく、時折現れる二人の知人らしき人に歳の差の件でからかわれている光景がよく見られる。最も外見の歳の差も含めてとてもお似合いの二人なので、知人は全員祝福してる様だ。

そんな二人の子供である俺も知人達には大人気らしく、俺の頭を撫でたり抱いたりする度に「将来美人になる」と言われていたりする。

そう、やはり今回の性別は女になっていた様だ。未だ感性はほぼ男のものだが、恐らく女として生きていけばその辺はどうにでもなるだろう。多分。

それに折角美形二人の女の子に生まれたのだから、前世の様な割と適当な生活をせずに美少女を目指して生活するのもいいかもしれない。良い環境に生まれたのだから『結構かわいい』よりも『凄くかわいい』を目指したい。

とはいえまだ1歳にもなっていないので出来る事はまだ何も無いのだが。

家庭環境だが、ファンタジー的な世界観の様だが我が家は貴族みたいなお金持ちでは無いらしい。とはいえ貧しいというわけでもなく、むしろ一般市民の中ではまあまあ裕福だと思われる。

父親はどうやら鍛冶職人らしく、聞こえてくる話による推測だと結構有名な名匠の様だ。強そうな騎士っぽい人が鍛造の依頼に来た事があったので、俗に言う王宮などの場所で働いてる人達にも依頼されているのかもしれない。

最も王制かどうかはまだわからないので、ただの鎧を着た剣士だった可能性もあるが。

さて、見た目通りに力仕事をしていた父親に対して、母親は何やらアクセサリ等を作る仕事をしている様だ。ただし普通のアクセサリではない。ファンタジー世界に必要不可欠である、いわゆる魔法具と呼ばれるものだ。

母親はどうやら父親ほど有名な魔法具職人では無い様だが、それでも結構人気の製作者らしい。何でも安価で買えて値段の割に効果が高めなんだとか。

いわゆる薄利多売の形で儲けているのかと思いきや、純粋に貧しい人にも身を守る魔法具を手に入れる事が出来る様にとの思いで作っているらしい。外見も内面も綺麗な素晴らしい母親だ。

しかしそれだと善人キャラによくありがちな儲け無し、もしくは労力と釣り合わないなんて事になってるんじゃないかと心配したものの、そこは大丈夫らしく安心する事が出来た。

どうやら母親は強力な魔法具を作る事が出来ないものの、下級の魔法具なら非常に効果の高い物を簡単に作る事が出来るらしい。技術特化というべき方向性の人なのかもしれない。

そんな感じの家庭環境で生まれたおかげでまず貧乏になる事は無く、周囲の人間も良い人が多いので突発的なもの以外は危険も無い。平和に生きる事が出来そうな素晴らしい環境だった。

これならば何でも出来る能力なんて貰わなくても平和に暮らせたかもしれない・・・と思ったが、あの時の正人おじさんの事を考えると何も要求しなければ落ち込んでいた可能性もあるので、これは

これでいい事にしよう。

「あー」
「ん、どうしたのレフィアちゃん？お腹空いた？」
「うー」
「ちょっと待っててね？」

空腹になってきたのでとりあえず母親を呼んだ。流石におっぱいを吸うのはもう慣れたが、最初のうちは何とも言えない感情に襲われて大変だった。
何せ相手は母親で一応母親という認識もしっかり持っているんだが、それでも若くて綺麗な女性なのだ。元男としてはちょっと心にくるものがあり、しかし今は女の赤ちゃんなので性欲に繋がるわけではなく・・・
そんな何が何だかわからない状況だったせいで、母乳を飲んでいる時はほぼ無心で余計な事を考えない様にしていた。ちなみに今ではもう慣れたので普通に吸う事が出来る。
同じ様な理由で下の世話も色々と思う所があったものの、今はもう諦める事にした。でも一人で歩き回れる様になったらすぐ自分で何とか出来る様にするつもりでもある。流石にこれに関しては慣れるのは無理だ。

そんなこんなで赤ん坊ライフを送っていた俺・・・いや、女の子になったから一人称を私に変えた方がいいのか？
・・・まあその辺はそのうち直すとして、そんな俺だが、流石に家の中でひたすら寝ながら情報収集するのも飽きてきたしまった。
家の中で集めた情報でこの世界が中世的な典型的ファンタジー世界に近いものだと言う事はわかったものの、詳しい所までは知る事が出来ない。機械の代わりに魔法具が発達している所までは判明しているが、どこまで発達しているのかはわからないのだ。

魔法技術が現代科学並に発達しているのかどうか、中世的世界だが細部はどうなのか、種族は人間以外に存在するのか、大陸や国はどうなのか、モンスターは存在するのか・・・興味は尽きない。
ダンジョンの様なものが存在するなら一度は行ってみたいし、学校があるなら通う事になるだろうから気になるし、そして何より魔法がどういったものでどうすれば使えるのかも気になる。
何でも出来る神様的なパワーを使えば寝ながらでも情報を得て全部知る事が出来るし魔法も使えるだろうが、それだと面白くない。実際に見て聞いて体験してこそ面白いのだ。俺はゲームだって最初は攻略本を見ないでプレイするタイプだ。
とはいえこのまま自由に動ける様になるまで知的好奇心を抑え続けるのも苦しい。ならばどうすればいいか？

答えは簡単。自由に動き回って好き勝手学べばいい。

動き回れないと言っているのに矛盾しているじゃないか思うかもしれないが、神様的なパワーを使えばそれも可能なのだ。かといって急速成長するのは良くないので、意識だけを飛ばすのだが。
簡単に言えば、分身みたいなものを作ってそれで活動するのだ。実体化して行動するのも良さそうだが、まだこの世界の常識や言葉を覚え切れていないので最初のうちは幽霊の様に透明な体、いうなればエーテル体で行動するべきだろう。

エーテル体とはいえ何らかの理由で目撃される可能性もあるので、人型をとっておいた方がいいだろう。その場合どういう形を取ればいいだろうか。
今の赤ん坊の姿で行動するのは少々問題だし、前世の姿で行動すると今の女の子の体に馴染めなくなる可能性もあるので却下。
ならば適当な姿に変える必要がありそうだが・・・

「うー・・・」
「ふふっ、どうしたの？」

エーテル体の姿をどうするか悩んでいるうちにどうやらバタバタと動いていたらしく、それを見た母親が優しげな微笑みを浮かべながら俺の方を見ていた。
その母親の姿を見て思いついた。

俺の成長後の姿をトレースした姿にしてしまおうと。

これなら自分の姿を見てもそこまで違和感を感じないだろう。自分の未来の姿を先に見てしまうというのは少々楽しみが無くなってしまうが、恐らく両親のどちらかに似ているだろうから想像しやすいのでそこまで気にならない。
という訳でこれで決定という事にしよう。さて、早速・・・といいたい所だが。

「うー・・・」
「あら、おねむかしら？」

そう、眠いのだ。分身を出しておけば本体の俺が眠っても問題は無いと思うが、今はそんな事より寝る方が重要なので却下する。
分身で家の外に行くのは起きてからにしよう。

という訳で、おやすみなさい。

第3話（前書き）

この作品は思いついた事を試す事にも使われるので今後の展開なんか気にしません。
なので矛盾も発生しそうですが、気にしない方向でお願いします。

第3話

その少女は思わず見蕩れてしまう程に可憐だった。
この世界では珍しくも無い金色の髪の毛を腰の辺りまで伸ばしていて、毛先に向かうにつれてふわふわと癖がついている。まるで物語に登場する妖精の様な印象を抱かせるその髪の毛は、きっと撫でた時の触り心地も良いだろう。
二重でくりくりとした大きい瞳が愛らしさを感じさせ、鼻は高くスッと一筋通っている。唇は小さく瑞々しいピンク色で、唇の端を僅かに上げて微笑んでいる少女は見たものを魅了する様な可愛らしさがある。
身に纏っている真っ白なワンピースが少女の清純さをより引き立ててお り、そよ風に揺れるワンピースの裾と髪の毛が少女の儚げな美しさを演出している。
見た目12歳くらいの少女だがその可憐さは間違い無く男女双方の目を引き、まだ子供だとはいえ本気で惚れてしまう者も居るのではないかと思うくらいには魅力的だ。
俺自身もとある問題点が無ければロリコン宣言しても良いくらいには見惚れていた。最もその問題点が何よりも大問題なのだが。
その問題点とは・・・

（おいおい、未来の俺可愛すぎだろう）

そう、この少女は俺が神様的なパワーを使用して作り出した、12歳時の俺の姿をしたエーテル体なのだ。流石に未来の自分の姿にロリコン宣言して求愛する訳にもいかない。
しかし本当に可愛い。前世ではナルシストの精神を全く理解出来なかったが、もしかしたら今回の人生では理解出来てしまうかもしれない。それくらい可憐だったのだ。

というかここまで可愛らしい少女の姿だと、未だ男性意識が強く残っている俺には違和感が強く付き纏ってしまいそうだ。まさか自分が可愛すぎて違和感を持つなんて事になるとは思わなかった。実際に１２歳になるまで生活していれば慣れるかもしれないが。

まあそれはおいおい慣れる事を期待しておくとして、当初の目的である実体化も可能なエーテル体での散歩を実行する事にする。

目的は単純に暇と好奇心を満たす為のものだが、同時にこの世界の文明レベルを確かめたり多種族の存在の確認などの情報収集も兼ねている。

出来れば魔法の使い方なども見ておきたいが、詳しい使い方を知る事が出来るかどうかは完全に運次第だと思うので気にしないでおこう。

目を瞑り意識をエーテル体の方へと集中する。本体である赤ん坊の肉体にも意識は残っているが、殆どまどろんでいる様な状態なので騒がしくならない限りは寝ているのと同じ状態だ。

閉じていた瞼を開くと視界に眠っている様に見える俺らしき赤ちゃんの姿が見えた。どうやら意識を移す事は無事成功した様だ。軽く手足を動かして見るが何の問題も無く動かせる事が確認出来る。

それにしても細い華奢な手足で力もそんなに強く無さそうに見える。どうやら俺は父親の立派な筋力を受け継がなかった様だ。尤も物語に良くある様な見た目に反した膂力を持っている可能性も無いとは言い切れないが。何せファンタジーな世界なのだから。

『さて出発するか・・・声も可愛いな』

なんだか本格的に一人称や喋り方を変えた方がいい気がしてきた。こんなに可愛らしく成長するのならそれらしいものの方が受けもいいだろうし、俺も早く女の子の肉体に慣れるかもしれない。何より

可愛い子はより可愛くあるべきだと思う。
　という訳で、まずは一人称を私に変える所から始めよう。私だったら敬語で話す時に使っていたから違和感も無く自然に話せる筈だ。
　会話する時だけ一人称を私に変えるというのはあまり好ましくない。使うなら普段から同じものを使わないときっと馴染むのに苦労しそうだ。

　いい加減ただ考え事をし続ける訳にも行かないので、さっさと散歩を開始する事にする。今の体は実体を持たないエーテル体なので幽霊の様に壁抜けも可能なので外へ出るのは簡単だ。
　少しだけドキドキしながらも壁をスーッとすり抜けると、まばゆい陽の光が空から降り注いできた。外へ出るのには成功した様だ。

『おおー・・・のどかでいい感じだ』

　周囲を見回した所科学的なものは全然と言っていい程に見当たらないが、代わりに魔法を用いたと思われる物が見られる。それらを身ながら俺は、もとい私はのんびりとふらつき始めた。
　規模は村か町かという程度の小さなものだが、道には魔法で光るのだろう電灯らしきものがいくらか立ち並び、広場らしき場所には大きなクリスタルの様なものが鎮座している。何かの用途で置いているのか、それともただのモニュメントなのかはわからないがとても綺麗だ。
　道は塗装とまではいかないが綺麗に固められている様で、家屋は木の柱と粘土質の土壁を用いて作られていると思われる。我が家のから少し離れた場所に石作りの建物があるが、そこからカンカンと音が聞こえてくるので恐らく父親が働いている鍛冶工房なのだろう。
　店が立ち並ぶ商店街らしき場所ではそれなりに活気があるらしく、村人や商人と思わしき人以外には冒険者と思われる人が行き来している。と言っても冒険者と判断した理由は装備だけなのだがきっと

当たっている筈。
　その証拠として冒険者達から聞こえてくる会話の内容から、洞窟がどうこうとか魔物がどうこうとか依頼がどうこうとか聞こえてくるのだ。絶対とは言い切れないが、ほぼ間違いは無いだろう。

　転生してから久々の外出で見て回るのが楽しくなって来てしまい、あちこちチョロチョロと動き回る事数時間。
　何とも美味しそうな串焼きを売っている屋台の仕事を見学してみたり、はたまた冒険者が宿泊している宿屋に入って冒険者のバカ話を盗み聞きしたりと中々楽しい事が多かった。
　残念ながら魔法の詳しい使い方は分からなかったが、それはもっと成長してからという事で期待しておこう。母親が魔法具職人なのだから簡単なものは教えてもらえる筈だ。
　そんな訳で一通り町を見て回った私は、巨大なクリスタルのある広場へと戻ってきた。

『それにしても大きいなぁ』

　前世ではこんなクリスタルが見付かったら間違いなくニュースになるのではないだろうか。見た所高さ3メートルくらいはあるので自然と見上げる形になってしまう。
　立派なものだと感心しながら見上げていると、そこでようやく空の異常に気が付いた。太陽はあと数時間で沈むだろう位置にあるのだが、同じ空に大きな月が一つと、小さな月が六つ存在しているのだ。
　引力とか詳しく知らないのだが大丈夫なのかと少し不安になったが、現時点で普通に生活出来ているので全く問題無いのだろう。そんな不安が消えると次に気になるのは、月の色だった。
　七つの月はそれぞれ違う色をしている。黄色い普通の月の他には、赤・青・緑・銀・茶・白の六色の月が天に存在しているのだ。転生

してから見たものの中で最もファンタジーを感じさせてくれる光景だった。

この七色には何か意味があるのだろうか。何故色がついているのだろうか。そもそもまだ太陽が沈んでいないのに何故月がこうもはっきりと見えているのだろうか。色々と気になる事はあるが、今はとりあえずこの幻想的な空を見続けることにした。

結局この日は太陽が沈むまでのんびりと月を眺めていた。散歩の続きはまた後日にしようと思う。

第3話（後書き）

感想読んでますけど返信はしませんー

いや、返信した方が良さそうなものには返信するかもしれませんが。

第４話（前書き）

転生ものってもっと子供時代を大事にした方がいいと思うんだ。
いったいどれだけの子供時代がすっ飛ばされた事か・・・

第４話

エーテル体を回収して暫くボーっとしていると我が家に客が来た様だ。我が家は両親の仕事柄、依頼などの客が頻繁に来るのだが、今回はどうやら仕事の客では無いらしい。

この世界の言葉はまだ簡単な単語理くらいしか理解出来ない為会話の内容はわからないが、声で判断するに結構親しい間柄の様だ。親戚か誰かだろうか。

少し気になったのでハイハイで移動し客を見る事にした。

「ーーーレフィアーーー」

「レフィアーーー」

どうやら私の話で盛り上がっているらしい。何だか少しだけ恥ずかしくなった。が、それよりも個人的に気になる点があったせいですぐに恥ずかしさは無くなった。

私の気になった点。それは今視線の先で両親と談笑している男性だ。

（正人おじさんと同じオーラを感じる・・・）

いまいちパッとしない外見。見た目からして覇気が無く、うだつの上がらないおっさんだと断言出来る様な弱弱しい雰囲気。その姿は本当に正人おじさんにそっくりだった。

違いを指摘するなら、生前の正人おじさんの様な暗い感じはしないという点だろうか。私の両親はおじさんを疎ましく思っている訳でも無いみたいなので、対人関係では正人おじさんより上なのかもしれない。

正人おじさんも今の私の両親みたいな親戚がいたら、あんな残念

な死に方はしなかったかもしれない。と思ったが、よくよく考えたら私の前世がまさしく今の両親と同じポジションだった事を思い出した。という事は環境が問題だったんだろうか。

「ーーー、レフィア？ーーー」

母親に呼ばれた様なので、ハイハイで母親へ突撃する。早く二本の足で立って歩きたいものだがもう暫く我慢だろう。

母親のすぐ近くに到着するとそっと優しく抱き上げられた。そしてそのままおじさんの方へと顔を向けられる。どうやら自己紹介的なものだったらしい。

しかし本当におじさんに似てるな・・・いや、顔はそんなに似ていないが、それ以外は殆ど同じと言ってもいい位だ。

「うー」

「ーーー、レフィアーーー」

相変わらず言葉はわからないが、よろしく的な意味を持つ単語が聞こえたのできっと挨拶だろう。・・・早い内に言葉を覚えて、せめて聞き取りだけはきちんと出来る様にしなければ。

そんな事を考えながら、大人しくおじさんに頭を撫でられるのだった。

生まれてから半年くらい経っただろうか。詳しくはわからないが、とりあえずそれくらいの時間が流れた。季節は冬である。

ここ最近はひたすら言葉を覚える事を重点的に行動してきたので、会話の聞き取りだけなら何となく理解出来る様になった。尤もあまり早く話されると分からなくなってしまうが。

ともかく聞き取りが出来る様になったのでエーテル体での散歩における情報収集が捗る様になった。とりあえずそれを纏めようと思う。

まず先程半年くらい経ったと言ったが、どうやらこの世界でも1年は12ヶ月らしい。1ヶ月は全て32日で数えるらしいが、ともかく慣れ親しんだ数え方だと安心した。

しかし1週間は8日換算らしく、どうやら空に浮かぶ太陽と月の数に対応しているらしい。曜日の呼び方もそれに対応しているのだが、少々長くなるのでここでは省いておく。

更に1日は30時間であり、太陽が顔を出した時から完全に沈む時までの明るい時間を陽の○時。太陽が完全に沈んでから再び太陽が個を出すまでの暗い時間を月の○時と呼んでいる。

これ以降の分・秒は前世と同じらしいので省略する。

次に魔法に関してだが、多少は魔法に関して知る事は出来たが詳しい使い方はわからなかった。実際に魔法を使っている人は居てもその使い方を言葉に出す機会が無いので仕方が無い。

代わりに知る事が出来たのは、魔法の属性は曜日と同じく太陽と月に対応しているという事。そして魔法の使い方には詠唱魔法と、魔法具作成にも使う魔法印の二種類があるという事だった。

属性は日本で言う七曜に無属性を足したもので、太陽と月の色と共に1週間で表すと月（黄月）火（赤月）水（青月）木（緑月）金（銀月）土（茶月）無（白月）日（太陽）となる。

属性の呼び方は順番に、ルース・サース・ウース・ドゥース・メース・ノース・ゼース・シャースとなる。正直慣れるまでは分かりにくいから困ったものだ。何せ曜日もこの呼び方なのだから。

二種類の魔法の使い方だが、魔法を使用する理由によって切り替えるのが常識らしい。

詠唱魔法はその名の通り詠唱を行い精霊の力を借りて魔法を放つもので、魔力消費はそこまで多くなく魔法の持続力はあまり無いものの効果が高い。なので詠唱魔法は戦闘などの短い手間で高い効果を求められる場合に使われるのが殆どだという。ちなみに無詠唱もあるらしいがこちらは詳しく知らない。

対して魔法印は精霊に魔力と共に魔法のイメージを送る事で魔法の効果を紋章化して貰うもので、詠唱魔法と比べて魔力消費が少々高いものの魔法を紋章化して持続させる事が出来る。魔法具を作る際に使う技術も魔法印のもので、紋章を紙や魔法具に焼き付けたり刻み込んだりして使う。

しかし魔法印は制御がとても難しいらしい。何でも少しでも精霊に渡す魔力量とイメージにズレが合った場合は同じ紋章が作れないらしく、何度も同じ紋章を作る為には繊細な魔力操作技術とイメージが必要だという。私の母親が凄いと言われているのは、恐らく値段の割に高効果な魔法具を量産出来ているからなのだろう。

短時間で高い効果を求める詠唱魔法か、長時間効果を持続させる魔法印か。どちらも長所と短所があるが使いこなせる様になりたいものだ。

（でも、その前に魔法や魔力の基本的な事を知らなければ・・・）

きちんと走り回れるようになり、舌もきちんと回る様になったら魔法を教えて貰えるように母親に交渉する事にしようと思う。

さて、そんな魔法知識に心を躍らせているここ最近の私は、相変わらずエーテル体で散歩していた。

のんびりふらふらしていると猫を発見する。どうやら殆どの動物はエーテル体を視認出来るらしく、私を見ると怖がって逃げてしまう事が殆どだった。見慣れないからだろうか。

私は基本的に動物好きで、猫は勿論犬も鳥もハムスターも好きだ。

なので迂闊に近づく事も出来ずに逃げられると悲しい気分になってしまうので遠くから眺めるだけにしていたのだが・・・なんと、初めて猫が私に向かって歩いて来ているのだ。
その猫は全身黒い毛並みを持つ中々の美黒猫。もしかしたらこのまま前世ぶりの動物とのコミュニケーションを取れるのかとワクワクしていたのだが。

『そこの透明なお前、何者だ？』

その黒猫のニャーと言う鳴き声の副音声の様に、二重になって聞こえた結構渋くてカッコいい声を聞いて思考やら動きやら色々と停止してしまったのだった。

第４話（後書き）

おっさんのキャラばかり増える。

第5話

重なる二対の視線。片方の瞳は驚愕に彩られていて、もう片方の瞳は警戒を抱いている。
勿論前者は私の事で、後者は目の前にいる喋った黒猫だ。

『まさか通じていないのか？精霊に似た体を持っているから言葉も通じると思ったのだが・・・』

どうやらこのエーテル体は精霊と似た様な印象を受けるらしい。私のこれは神様的なパワーで作られた分身なのだが・・・もし精霊と呼ばれる存在がこの世界の神によって作られたのなら、確かに似た様なものなのかもしれない。
尤も私の目に精霊らしき存在が映った事は無く、それらしき存在を感じた事も無いのだが。

『いやしかし、俺の言葉を聞いて驚愕していたな。ならば聞こえていると判断してもいいものだが・・・む、聞こえているから驚愕して反応が無いのか？』
『あ、き、聞こえている。聞こえているよ』
『そうか、ならばやはり驚愕して反応出来なかったという事か。・・・俺の言葉が理解出来る存在ならばそんな事は無い筈なのだがな』

どうやらこの猫と会話出来る者達は、この様に会話出来る事こそが普通であるらしい。台詞から察するに普通の人間にはこの副音声染みた声は聞こえないのだろう。
しかし、多少は気を取り戻した今でもやはり信じられない思いだ。ファンタジーな世界ならば動物と会話出来る存在や、もしくは喋る動物がいるのかもしれないとは思っていたものの・・・まさかこん

な身近に存在していたとは思わなかった。
この場合は黒猫の声を聞く事が出来る私が珍しいのか、それとも対象が限定されているのかもしれないが喋る事が出来る黒猫が珍しいのか、その判断は今はまだ情報が少ないので断定は出来ないが・・・いや、どちらにしろ私は珍しい存在なのか？

『して、お前は何者だ？精霊でも無ければ亡霊かとも思ったが、流石にあの亡者共とは違うのだろう？』
『幽霊も居るのか・・・私はまあ、人間だよ。普通じゃない方法でエーテル体・・・分身の様な体を作って散歩しているんだ』
『ほう、分身か。という事はわざわざその様な事をしなければ外を出歩いて情報を集める事も出来ない存在という事か？例えば・・・罪人、とかな』
『ち、違う違う！』

真っ直ぐ伸ばした尻尾をゆらゆらと揺らしながら、今にも飛び掛らんとしている黒猫。たとえエーテル体が破壊されても問題は無いものの、勘違いされたままでいるのは正直勘弁だ。それに彼が普通の猫じゃなければ何らかの異常が発生する場合もある。
ともかく彼を落ち着かせる事が先決だと、何とか落ち着く様に頼み込む。そして何とか攻撃態勢から立ち直ってくれた。
しかし警戒はされているらしく、私の挙動に集中している様に見える。

『ならば貴様は何故その様な方法で出歩いているのだ？その様な魔法を使うものは滅多に居ない上に十中八九後暗い事に手を染めている者が使うものなのだがな』
とうとう貴様と呼ばれてしまった。見た目は可愛らしいのに中々厳しい猫だ。というか、分身を作る魔法も存在するのか。

『私はただ単純に自由に行動出来ないから分身を使って散歩をしているだけだよ』
『散歩だと？いや、それはともかく、自由に行動出来ないというのはどういう事だ？病にでも臥せっているのか？』
『いや、生後半年なんだ』

言った瞬間凄まじい速度で突撃してきたので慌てて空へと避難する。何となく結果が予測出来ていたからこそ回避出来たものの、そうでなければ間違いなく彼の鋭利な爪で引き裂かれていただろう。
というか飛び掛ってきた瞬間に彼の全身が薄く黄色い光を帯びていたのだが・・・やはり魔法だろうか？流石に物理攻撃ではこのエーテル体は破壊出来ないだろうが、魔法だとどうなるかわかったものではない。

『貴様ふざけているのか！？やはりこの場で葬っておくべきか！！』
『ちょっと待ってくれ！本当なんだ！』
『こんな流暢に話して分身を作る生後半年の赤子が存在するか！！』

言ってる事は確かに向こうが正論なのだが、正しいのはこちら側なのだ。仕方が無いではないか。
しかしこのままでは私は満足に散歩も出来なくなってしまう。何とかして事実を知ってもらって納得してもらうべきなのだが・・・どうすれば良いというのか。

『こうなれば・・・《彼の者の波を辿り　我を導け》』

黒猫が何やら呪文らしきものを唱えると、すぐさま私も元を離れて走り出した。私の知っている詠唱は魔法の名前を最後に唱えるものなのだが、彼が使ったものはそれが無いので普通の魔法では無い

可能性がある。
　それはさておき、彼はどんどん私から離れていく。急いで追いかけつつもどこに向かうのかと彼の進行方向を見ると・・・なんと、私の家だった。
　まさか先程の聞きなれない形式の魔法で本体の場所を探知したというのだろうか？

『でも、本体を見てもらえば納得は出来るだろうから問題は無いか』

　開いていた窓から室内に突撃する黒猫を見ながら、私はゆっくりと本体も元へ向かう事にした。

　我が家に戻り本体の元へ向かうと、まるで剥製の様に動きを止めて本体を凝視している黒猫の姿がそこには存在していた。まるで先程彼が話す様を見て驚愕していた私の様だ。
　しかし驚愕の度合いでは私より遥かに凄まじいものではないだろうか。私はファンタジーという事で多少は予測出来ていたものの、彼はありえない事として切り捨てていたのだ。その驚きは計り知れない。
　現に私が停止している彼を発見してから既に3分程経過しているのだ。彼の脳内では様々な思考が絡み合って混乱しているのか、はたまた真っ白になって思考出来なくなってしまっているのだろうか。

『そろそろ認めたらどうだ？』
『・・・み、み、認めざるを得んのだろうが・・・認められるかぁー！？』
『だろうね』

その日その時、甲高い悲鳴とも言うべき猫の鳴き声が村中に響いたそうな。

第5話（後書き）

どれくらい幼児時代を続けようか悩み中。

第6話

言葉を話したり魔法の様なものを使う黒猫と遭遇してから早数ヶ月。あの日から私の周囲では色々と変化があった。

まず、エーテル体で散歩している時に件の黒猫と一緒に行動する事が多くなった。理由は単純に友達になったからだ。

本人・・・本猫?は、私の本体は乳幼児だと理解しつつも警戒していたので見張るのが目的だっただろうが、流石に数ヶ月間もの期間を共に過ごせば仲良くもなるというものだ。

そんな感じで仲良くなった黒猫の名前はクロ。本当は物凄く長くよくわからない名前なのだが、名前の一部からとってクロと呼んでいる。とてもわかりやすいあだ名だ。

さて、そんなクロは普通の猫かと思いきや普通では無いらしい。ファンタジーだから動物も魔法を使うのかと思っていたが、流石に魔法を使う存在は少々特別らしい。

クロは人間達の考え方で分類すると魔獣そうだ。ちなみに普通の野生動物はそのまま動物と言われ、魔法を扱える程の知性がある動物を魔獣と呼ぶらしい。ちなみに人を襲う動物全般を魔物と呼んでいるらしく、盗賊なども魔物扱いだという。つまり殺しても何ら問題は無いという事だ。恐ろしい。

とはいえ盗賊全てが魔物認定される訳では無いらしい。その辺の詳しい事はクロに聞いてもわからなかったが、別に今知らなくても問題無いので気にしない事にする。

さて、そんなクロと共に行動する様になった事で生じた変化もある。

『おはよー！』
『あそんでー！』
『あーはいはい。落ち着いて』
『随分と人気になったものだな』
『おかげさまで』

今まで得体の知れない存在として見られていたせいで動物達に怖がられていたが、クロと共に居るという事で危険な存在じゃないと判断されたらしい。
すると犬・猫・鳥などが少しずつ私に接触して来る様になり、数ヶ月経った今では動物の言葉が通じる人間の様な存在として村中に知れ渡っている。
今私の元にやってきたのは子猫と小鳥のペアで、見た目食う食われるの関係に見えるが仲はいい様だ。今も子猫の背中の上に小鳥が乗っていて見る者を和ませている。

『そういえばどうして私は動物の言葉がわかるんだ・・・？』
『お前・・・今更過ぎやしないか？』
『いや、深く考えてなかった』
『馬鹿め』

酷い言われ様だがファンタジーだからと思考停止していたのは事実なので反論はしない。

『会話出来る理由は簡単だ。我々が使っているのは統一言語だからな』
『その統一言語がわからない』
『お前はそんな事も・・・いや、お前はまだ1歳にも満たなかったか・・・』

どうやら私の実年齢を忘れていた様だ。まあ普段から外見年齢約１２歳程のエーテル体で行動しているから忘れていても仕方が無いのかもしれない。事実普通では無いし。

ともかくクロから統一言語について教えて貰った。どうやら統一言語というのは世界に存在するあらゆる知的生命体と通じる事が出来る言語らしい。勿論知的生命体とは言っても知性が低すぎる存在とは会話出来ない様だが。

さて、この統一言語なのだが、普通の言語とはかなり違うらしい。何でも本人が口から発している言葉を理解しているのではなく、言葉と共に放たれている意思を受信しているらしい。

簡単に言えばテレパシーの様なものか。そういえば動物達と会話していると言葉と共に鳴き声が聞こえている。これが言葉ではなく意思を受信している事の証明なのだろう。

『あれ？でも他の人達は動物の声が聞こえてないみたいだけど』
『殆どの人は統一言語を理解出来ん。詳しい理由は知らんがな』
『殆どという事は、理解出来る人も居るのか・・・』
『存在は知られているらしいからな。前例が無ければ統一言語の存在の確認すら出来ん』

つまりは、今この世界では私しか統一言語を解する事が出来る人間が居ないという可能性もあるという事か。周囲に知れれば面倒な事になるかもしれないので、注意した方がいいのかもしれない。いっそ統一言語を使うのはエーテル体の時だけにしておこうか？

まあ本体の赤ちゃんの方は普通にあーうー言っててもいい意思を理解されない様なので、無意識で使い分けが出来るのかもしれない。クロは普段から統一言語しか使わないのでその辺はわからないとの事。なので自分で確かめる他無いだろう。

エーテル体を回収し本体に戻ると、最近毎日行っている訓練へと移る。
訓練とは魔力の解放だ。クロから魔法について少ないながらも色々と教えてもらった所、魔法を使える様になるにはまずは体内にある魔力を外に出せる様にしなければならないという事がわかった。
クロは才能があったのか、それとも精霊が見えているからか、一年程で魔力を解放する事が出来たらしい。本来ならば数年かかる作業との事だ。
ただ魔力を解放するだけならば神様的パワーを使えば簡単に済ませる事が出来るものの、こういった事は自分の力で使える様になりたいので簡単な道は選ばない。
おかげで折角与えられてチートパワーもエーテル体作成にしか使っていない。宝の持ち腐れと言われるかもしれないが、私は満足しているので何ら問題は無い。

しかし、魔力の解放が全然進まない。体内に魔力が篭っている事を感じる事は出来る様になったが、それを体外に放つ事がどうしても出来ない。
クロが言うには、人間と動物の魔力解放の仕組みが違う可能性もあるという事が。それでも魔力を感じてそれを操作し放出出来る様にするという行動に違いなんて発生するのだろうか。
体内にある魔力を少しだけ巡らせる事は出来る様になったものの、放出に関してはまるで手ごたえが無い。普通ならば数年かかるという点から考えるとこの進行速度が普通なのかもしれないが、実際はどうなのか判断は出来ない。
何せその普通の判断も魔獣達の普通であり、更にそれを教えてくれたクロは一年で魔力を解放した才能ある魔獣なのだ。人間の場合はもっと年月がかかるという可能性もあるかもしれない。

（結局クロの報告待ちか・・・）

クロは王都の方にいる知り合いに会いに行くという事で、私と一緒に散歩が終わってからすぐに出発した。

その際に、その知り合いが人間が使う魔法について詳しいという事で話を聞いてきてくれると言っていた。クロとクロの知り合いに感謝だ。

しかしここから王都まではクロが全力で走っても二日かかる距離らしいので、最低でも四日間はクロと会えないという事だ。クロと出会ってからほぼ毎日一緒に遊んでいたので少々寂しい。

代わりに動物達と遊んで寂しさを紛らわそうかと考えながら、私は体内の魔力をぐるぐると巡らせていた。

『その、なんだ。・・・どうやら人間は6歳になった時に協会と呼ばれる場所で魔力の解放を行うらしいぞ』

『この数ヶ月間の努力は無駄だったのか！？』

衝撃の事実に私は泣いた。

第7話（前書き）

魔竜編（仮）
はじまりはじまり。

第7話

この世界に転生して1歳になった。両親は私の誕生日をとても嬉しそうに祝ってくれたのがとても嬉しかった。

お礼と言っては何なのだが、ここ最近こっそりと言葉の練習をしていた私は両親にそれぞれ「おとーたん」「おかーたん」と呼んでみた。

すると両親は驚愕して動きを止めた後、再度言う様に言ってきたので望み通りに呼んでみせる。すると喜びのあまりテンションが振り切れてしまったのか、二人とも喜びの叫びを上げた。近所迷惑だ。

そして母親に抱き上げられたままひたすら頬擦りされ、父親は普段のワイルドな印象から考えられない程に頬が緩みまくっていた。そんなに嬉しいものだったのかと少し引いてしまったものの、二人が嬉しいので何だか私も嬉しくなった。

大きくごつごつとした父親の手で頭を撫でられるのもとても気持ちがいい。子供のせいなのか、頭を撫でられると何故か無性に気持ちよくて嬉しくなってしまう。両親以外にも近所の大人に撫でられる事もあったがそれでも嬉しかったので、今の私は撫でられるという行為自体が好きなのかもしれない。

このままでは誰にでも撫でポされてしまうのでは、という馬鹿みたいな事を考えるくらいには嬉しいのだった。

『なのでその嬉しさをクロに分け与えよう』

『別にいらんのだがな』

『そう言わずに。ほらほら』

『むぅ、ゴロゴロ・・・』

いらないと言いつつも微妙にこちらに頭を差し出したクロのツンデレ具合にニヤニヤしつつ、頭や首などを撫でる。

クロの毛並みは極上といってもいい位にサラサラもふもふなので、撫でているだけで幸せになれる。撫でられているクロもとても気持ち良さそうにしているので二人とも幸せ。幸せスパイラルだ。
暫くお互いに幸せを振り撒いていると、周囲に放たれる幸せオーラに引き寄せられてきたのか猫や犬が集まってきていた。どうやら全員撫でて欲しいらしい。
どうやら私の手はこの村の動物達を魅了してしまっていた様だ。異世界に転生してハーレムを築くとは、私もいっぱしのオリ主になったという事だろうか。動物相手なのだが。

『そーれそーれ』
『ふにゃぁ～』
『はふぅ・・・』

何故か動物達が一箇所に集まっている事を不思議そうに眺めている村人に気付いていたものの、どうせバレないからとそのまま両手に花、もとい両手に動物の状態で過ごす私だった。

ある日、本体で言葉の練習やら運動やらしていた時の話だ。
何やら外がざわざわと騒がしくなっているのが聞こえ、聞こえてきた声の中には『ドラゴン』という単語が含まれていた。
ドラゴン。ファンタジーの代名詞と言っても過言ではないあのドラゴンだ。村に来る冒険者の話を盗み聞きしていてドラゴンが存在するのは知っていたのでいつかこの目で見てみたいと思っていた。
外で何が起きたのかはわからないが、『ドラゴン』という単語が出てくるという事はそれに関する何かがあるんだろう。
ドラゴンスレイヤーの様なものが来たとか、むしろドラゴンが来たとかだろうか。もしドラゴンならかなり危険そうだが・・・

ともかく私も外を見に行ってみようと思い立ち、いつも通りにエーテル体を作り出して意識をそちらに集中し、家の外へと向かう事にした。

ガヤガヤと騒がしい村人達の会話から情報を得ようと盗み聞きしつつ、騒ぎの中心へと足を進める。

どうやらこの村の村長一家が今回の騒ぎに関わっている様で、村長の孫娘が涙を流しながら何かを話しているのが見える。

『む、お前も見に来たのか』

『あ、クロ。これはどういう事？』

『魔竜が東の山に住み着いたらしくてな』

魔竜というのは魔獣の竜の事で、高い知能を持ち魔法を扱う事が出来るドラゴンの事だ。勿論その分非常に強力であり、何でも魔竜が起こした被害は災害認定される程とも言われているらしい。

そんな存在であるが故に退治は非常に困難で、最上位の冒険者が数人でチームを組むか国が騎士団を派遣しなければ討伐は不可能とまで言われている。

『でもそれで何で村長さん家の娘さんが泣いてるの？』

『身柄を要求してきたらしい。竜は同属以外にも稀に人間の女性に興味を持つと聞いた事はあったが、真実だったとはな』

『なるほど、竜の嫁か』

確か村長の孫娘はとある貴族の息子に見初められて、半ば強制的に婚約を結ばされていたんだったか。孫娘は１５歳でその貴族は２５歳だったか。１０歳下の少女に婚約を強制するとはとんでもない話だと思った記憶がある。

村長一家も孫娘本人も婚約を嫌がっていたが貴族に逆らえなかっ

たんだったか。しかし、だからといってドラゴンに連れて行かれるよりはマシだろう。何せ相手は人間ですらないのだから。

『早速明日東の山に来る様に要求したらしいぞ。こなければこの村を襲うとも言っていたらしい』

『それじゃあ行かざるを得ないか・・・よし、クロ。明日ちょっと付き合って貰いたいんだけど、大丈夫？』

『お人好しめ』

『この村を気に入ってるからね。それに、村長さん家の娘さんにも可愛がってもらった記憶があるし』

孫娘が山に入りドラゴンが姿を現すまで、私とクロで姿を隠して追跡しよう。ドラゴンが現れたなら私の神様的パワーで動きを止めて孫娘さんを村へ転移させてしまえばいい。

そうすれば後は、残ったドラゴン相手に交渉や脅迫をするだけだ。魔獣は言葉が通じる相手だから出来るだけ殺したくは無いけれど、危険な様なら命を奪う事も覚悟しておくつもりだ。

ともかく全ては明日。ドラゴンを見た時に怖くて動けないなんて事にはならない様に注意しなければ。

第8話

魔竜の話を聞いてからすぐ、とりあえず村長の孫娘とドラゴンの情報を調べてみる事にした。
とはいえドラゴンに関しては最近東の山にやってきたという話くらいしかわからないだろうと思われるので、孫娘の情報が殆どになるだろう。

『そんなものを調べてどうするのだ？この事件に関しては役に立たないと思うが』
『いや、調べたら何故ドラゴンが村長さん家の娘さんを選んだかわからないかな、と』
『単に見た目だと思うがな』

確かに彼女はとても美しい。平民とはいえ貴族に見初められるくらい程には美しいのだから、ドラゴンだって見初める確立は高いだろう。
しかし気になるのだが、ドラゴンが人間の娘を嫁にして何をどうするのだろうか。下世話な話になるが、夫婦の営みなんかはどう見ても不可能だろう。食生活も会わなそうな気がする。
そんな噛み合わない関係で夫婦生活なんて続くとは思わないが・・・もしかしたら、ただ単に興味を持っただけなのかもしれない。気に入ったから傍に置きたいと人形扱いする様な考えなのかもしれない。

『案外普通に食うのかもな』
『恐ろしい事言わないでね。怖くなるから』
『この世界で最も恐ろしい力を持っているお前がそれを言うか』
『中身は人畜無害だから問題無い』

『不可視なのをいい事にあちこち盗み聞きしたり覗き見したりしているお前のどこが人畜無害か』

人畜無害だ。なにせ相手にはバレていないのだ。犯罪というものは発覚しなければ犯罪にならないのだから、誰にもバレず、これからもバレない覗きは害に認定されない。

最も害に認定されないだけで問題にはなるかもしれないが・・・いやはや人間の探究心と好奇心は真に恐ろしいものだ・・・

『私が知っているから害に認定出来るな』

『一緒に覗き見しているクロがそれを言うか』

『私は所詮獣だからな。人間の価値観での善悪は関係無い』

結局私もクロも自分勝手という事か。類は友を呼ぶという事なのだろう。

さてそんな事は置いておくとして。

村長の孫娘の情報を調べる為に早速様々な場所で会話を盗み聞きしたり覗き見したりと、人畜有害な方法で情報を集めてみた。

どうやら孫娘には想い人が居るらしい。それなりの頻度で村に来ていた冒険者の若者がその相手らしく、よく二人で会っていたと井戸端会議をしている主婦の方々が話していた。

何とも可哀想な事だ。貴族に嫁ぐ事になってしまったせいでその想い人とは結ばれない事が決定していたのに、その上ドラゴンという人外に見初められるとは。その相手の若者にとっても悲劇だろう。

ふと、その若者は貴族の件の話を聞いていなかったのかと疑問に思った。そこで井戸端会議の盗み聞きを続けると、どうやら数日前にこの村に訪れた時に聞いたのではないかという情報を手に入れた。

そういえば数日前にエーテル体で散歩をしている時に、村長の孫

娘と一緒に歩いている冒険者らしき青年を見た気がする。恐らく彼が孫娘の想い人であり、そしてその日に貴族の件に関しての話を聞いたのだろう。
　貴族に婚約を強制された件も最近の話だった。いきなりそんな話を聞かされた青年の心中はどれほどの絶望を感じていただろうか。貴族の屋敷に殴り込みなんて事はしないだろうが、出来るものならやりたいだろうと思う。

『しかし、本当に冒険者も孫娘も不運なものだな』
『本当に・・・貴族の方は代わりに良い生活が出来るかもしれないからともかく、ドラゴンはそんなの無理だろうし』
『いや、相手は魔竜らしいから案外生活に関しても色々と考えているかも知れないぞ。最も本当に嫁として扱うならばな』
『いきなり食べるなんて事は勘弁だね。急にやられると助けるのが間に合わなくなるかもしれない』
『お前のよくわからん力で蘇生すれば良いではないか』
『流石に死人を蘇らせるのは問題がありそうなんだけど・・・いや出来るだろうけど』

　それでも、一度終わってしまった事を変えてしまうのはあまりやりたくは無い。それに死者蘇生なんて事に手を出してしまったらこの先何かある度に神様的パワーで解決する様になってしまいそうな気さえする。死んでも蘇らせればいいと命を軽視すらしてしまいそうだ。
　それに蘇生された事が何らかの形でバレてしまったら私は確実に狙われるだろう。それこそ人間魔獣問わずにだ。そんな平和からかけ離れた生活は勘弁願いたい。

『そういえばクロは私の力を知っても色々要求しないよね』
『特に要求したい事も無いからな。それに叶える気も無いだろう？』

余程深刻な事だったらわからないが。何せ初めての、そして現在唯一の親友と言える存在なのだから。

・・・まあそんな事はどうでもいいとして、結局情報を集めても村長さん家の娘さんの恋愛事情くらいしかわからなかった。まあ最初からそこまで期待はしていなかったのだが。

全く意味の無い情報収集となった訳だった。・・・件の冒険者がドラゴンに立ち向かってくれれば私の力で応援するのだが。

ともかく、全ては明日という事だ。孫娘がいきなり頭からガブリとやられてしまわない様に気をつけなければ。

第9話

一晩経ち、村長の孫娘が魔竜の住む東の山へ行く事になる日。
孫娘に置いて行かれ無い様に少し早起きをし、エーテル体で村の出口へ向かうと近くの木の下でクロがのんびり寛いでいた。

『おはよう。もう行っちゃったなんて事は無いよね』
『もう行ったぞ。遅刻だな』
『えっちょっ』
『冗談だ』
『今回の件が終わったら美味しい魚をあげようと思ったけど止めるわ』
『ぐっ・・・別にその程度・・・！！』

そんな雑談を暫く続けていると村の方から村長一家と、東の山までの護衛と思われる剣を持った男性がこちらへ向かってきているのが目に入った。
やはり事が事なので全員元気が無く、村長一家は悲痛としか言い表せない表情を浮かべている。護衛の男性も元気は無い。
その場で最後の家族の会話を交わしているのを木の下で眺めながら、やはり危険そうなら神様的パワーを使ってでも助けた方がいいだろうと決心する。
私が先に東の山に行ってドラゴンを退治するという方法もあるが、相手は人語を解する魔竜なので孫娘に苦を強いない事に希望を持ちたい。
やはり命を奪う事には未だ忌避感があるのだ。そこまで高い知能を持たない魔物や危険な思想をもつ魔獣ならそこまで嫌では無いのだが。

さて、どうやらとうとう出発の様だ。号泣している両親を背に、孫娘と護衛の男性は村を出て東の山へと歩き始めた。
東の山までは歩いて２０分程で、村の周囲は少ないとはいえ魔物も出るのでそれなりに危険でもあるらしい。実は私は何だかんだで村から出るのは初めてなので、少し緊張している。

『とりあえず、追跡するクロの姿が見えたら不味いから不可視にするよ。ついでに消音と思念通話も』
『こういう時には積極的に使うんだな。そのよくわからん力は』
『むしろ、こういう人助けの時に使わずにいつ使うのかってね』

追跡がバレない様に対策を施してから私達も東の山へと向けて歩き出した。

１０分程歩き続けた所で、私は初めて魔物を見る事になった。大きな一角を持つウサギの様な魔物で、小型犬くらいの大きさのものだ。
遠目で見ただけでは魔物と動物の見分けがつかないのではと思ったが、よく見ると何処と無く異様な雰囲気を纏っているのを感じ取れた。クロに聞いてみると、魔物特有の凶暴性を感じ取ったのだろうとの事。
この凶暴性を感じる雰囲気は殆どの人も感じ取る事の出来るものらしい。確かにこれだけ異様な雰囲気ならば誰でも感じ取れるだろう。瞳からもどこか攻撃的な意思を感じる。
初めて見たそのウサギの様な魔物は、鋭く尖った大きな角を孫娘と護衛に向けて真っ直ぐに突き進み始めた。

「角ウサギか・・・」

どうやら角ウサギと呼ばれている様だ。そのままの名前で覚えやすいのはいいが、二人とも落ち着き過ぎている気がする。一応魔物なのだから油断すると危険だと思うのだが、護衛の男性はこの程度の魔物なら脅威には感じないのだろうか。確かにそれなりに強そうな外見だが・・・

ともかく初めて見る魔物と人の戦闘。様子を見るにあまり白熱した戦いにはならないと思うが、それでも一瞬も見逃さない様に見守る事にする。

『そんなに意気込んで見る様な戦いにはならんぞ』

『でも、初めて見る戦闘だからね。ワクワクしてるんだよ』

『その思いは裏切られるぞ』

裏切られるレベルの戦闘になってしまう程に戦闘力に差があるのかとワクワクしながら見守る。

突撃する角ウサギの角は走る勢いもついて、全てを貫き突き通す様な印象を抱かせる。対して男性は未だ剣すらも構えていないが、油断はしていない様に見える。

そして徐々に一人と一匹の距離が縮まっていき、あと人間の足で三歩程となった所で魔物は飛び上がり、自らの最大の武器である巨大な角に全体重を乗せて護衛の男性へと飛び掛る！

あわや男性の腹を突き破るかと思われたが男性は素早く横へと回避！そしてそのまま―――

―――片手で角ウサギの角を掴んで止めた。

『え？』

『ほら、裏切られただろう』

私の視線の先には、角を掴まれてパタパタと足を動かせている角ウサギの姿。先程まで纏っていた異様な雰囲気は未だ残っているものの、その姿はただの可愛らしい動物にしか見えない。
そして暫く拘束から逃れようと暴れる角ウサギだったか、疲れてしまったのか諦めたのか、すぐに悪あがきをやめてダラーっと全身の力を抜いてしまった。
そして護衛の男性はナイフを取り出して首に突き刺し、角ウサギは一瞬ビクンと痙攣して再び全身の力を抜いた。戦闘は終了した様だ。

『なにあの戦闘。というか戦闘とも言えない』
『体重の軽い角ウサギが飛び掛ってきても大した衝撃は無い。動きも単純だからな、体当たりを回避出来るなら多少体格の良い子供でも角を掴んで持ち上げる事が出来る』
『つまり、最弱の魔物だったのか・・・』
『もっと弱いのも居るぞ。この辺は山に到着するまでこの程度の魔物ばかりだ』

魔物との戦いといえばもう少し激しいものを期待していたので、まさしく裏切られた気分だ。というかその程度なら護衛すらいらないのでは無いだろうか。
どうやら私の期待に応えてくれそうな戦闘は東の山に到着するまで見られないらしい。私は少し落ち込みながら、先を行く孫娘と護衛の後ろを着いて歩いて行くのだった。

『尤も東の山に着いたらドラゴンが居るから戦闘すら発生しないかもしれんがな』
『私の期待は裏切られ続けるのか・・・・』

第9話（後書き）

弱い魔物はきっと物凄く弱いよね。

第１０話

残念な魔物、もとい角ウサギが現れてからは他の魔物も現れる様になった。
地面をゆっくり移動しながら攻撃時には器用に飛び掛る角イモムシや、動きが非常に遅く攻撃を見る事すら出来なかった角つむり等を見た。

角イモムシは普通のイモムシを小型犬程度の大きさにして角を生やした様な見た目をしていて、緑色の表皮に黒・白・橙の色で模様が描かれていた。
正直気持ち悪いとしか言いようが無い外見で、村長の孫娘もかなり嫌そうな顔をしていた。剣であっさり斬り殺した護衛の男性も、剣についた緑色の体液を見てとても嫌そうにしていた。
角ウサギの時はクロが食料にもなると言っていたが流石にイモムシは食料にもならない様で、角を切り取って背負っている麻袋へと入れていた。

角つむりは角の生えたカタツムリで、大きい・遅い・弱いの三拍子揃った魔物だ。しかもクロの話によると、この角つむりが一番弱い魔物らしい。
あまりにも弱すぎるせいで攻撃を見る前に護衛の男性が退治してしまった。一体何の為に現れたのか、何の為に存在しているのかわからない魔物だった。
ちなみにクロによると、この角つむりはあまり美味しくは無いが食べられるらしい。

『そういえばあの角って何か役に立つの？』
『詳しくは知らんが、何かの材料になると聞いたな。魔物の討伐証

明としての買取もされているらしいぞ』
『なるほど』
討伐証明に角を使うのはわかったが、今まで見た三体の魔物の角は違いが見られない。何か見分ける方法が存在するのだろうか。それともこの三種の魔物の角は全て同じなのだろうか。
知ってもしょうがない情報ではあるが、微妙に気になってしまう。

暫くして、遠めに東の山の山道入り口が見えてきた。そろそろドラゴンや山に住む魔物が現れる可能性もあるので気を引き締めて置く必要があるだろう。
うっかりしていて村長の孫娘を助ける事が出来なかった等という事態になってしまえば、私の行動が無意味になってしまうし間違い無く後悔する。
一応周囲を見渡すが、見たところ魔物の姿もドラゴンの姿も無い。今のところは危険は無い様だ。

『いや、そうでないぞ』
『ん？魔物とドラゴン以外に何か危険があるの？』
『あるぞ。すぐ近くにな』

すぐ近くという言葉に思わず首を傾げてしまったが、次の瞬間にその意味が理解出来てしまった。何故ならばその危険が今まさに村長の孫娘に牙を剥いて襲い掛かったからだ。
その危険というのは・・・護衛の男性だった。

「な、何をするの！？」
「うるせぇ！！ちくしょう、ドラゴンなんかに奪われるくらいなら・

・・俺が！！」
「や、嫌！止めて！話してぇ！！」

孫娘を後ろから羽交い絞めにして動きを拘束し、そのまま手早く衣服を破り裂こうとする男性。その欲望に滾った瞳を見て、私は身を竦ませてしまった。

酷く不快で気持ちが悪くなる目。男性が何をしようとしているのか理解出来てしまうせいか、普通のものとは根源が違う恐怖を感じてしまう。

気持ちが悪い。恐ろしい。前世での痴漢もあの様な感じだったのだろうか。確かにあの目が直接自分に向けられた挙句体を弄られてなら、恐怖のあまり動けなくなってしまうのも仕方が無いと思ってしまう。

なにせ私は端から見てるだけでも恐怖を感じるのだから。

『あ、た、助けないと！？』
『落ち着け』
『な、でも早くしないと！？』
『大丈夫だ。ドラゴンが来た』
『え？』

瞬間、まるで叩きつけるかの様な強風が辺りに吹き荒れ、護衛の男性だけが大きく吹き飛ばされた。村長の孫娘には風がクルクルと踊っていて、まるで風に守られている様にも見える。

そして現れたのは巨大なドラゴン・・・ではなく、緑色の短髪を風に靡かせて空から降り立つ美青年。しかしその頭には竜種の証か双角が存在し、腰元から長い尾が伸びている。

この世界のドラゴンは人型なのだろうかと呆然としてしまったが、クロに聞いて見るとあれは人化しているだけだという。知性を持ち魔法を扱う魔獣ならば大半は使用出来る魔法らしい。

『・・・クロも使えるの？』
『まだ使えんな』

まだまだ魔獣になって年月が浅いからしい。しかし魔力の解放をあっさり終えたクロなので、いつか近い内に人型のクロに出会えるかも知れないという事か。こんな状況ながら未来が楽しみになった。

そんな会話をしていると、気が付けば護衛の男性の姿が見当たらなくなっていた。逃亡したのかと思いきや、クロが言うにはドラゴンが消滅させたという。

そんなあっさり殺してしまうのかと驚愕してしまったが、よくよく考えれば相手は人型でもドラゴンなのでその辺は価値観が違うのだろう。それに賊が魔物扱いされてしまう世界なのだから、孫娘を襲おうとした男性も魔物みたいなものだろう。

私はまだ慣れていないのでそう簡単には納得出来ないが、少なくとも被害者の孫娘は納得しているみたいだった。

・・・で、何故孫娘はドラゴンに抱きついて居るのだろうか？先程の恐怖から助けてくれたからか？確かに人型だからドラゴンには見えないが。

「して、先程から姿を消してそこに居るのは誰だ？」
『嘘！？バレた！？』
『まあ、当たり前だろうな。相手が悪い』

このドラゴンの事を知っているのか聞きたくなったが、早く姿を現さないと護衛の男性と同じ様に消滅させられたら困るので大人しく姿を現す事にする。

さて、この私レフィアのエーテル体にとって初めての本格的な実

体化である。不可視のまま物に触れる程度の実体化はした事があったが、正直それだけで問題が無かったので使う事の無い機能だと思っていたので少しだけ嬉しかった。
最もその嬉しさを維持出来る様な状況では無いのだが。

『全く、よりによってあの賢風竜とはな』
「お前は・・・ああ、最近聞いた事がある、ここ最近で最も若い魔獣だな。天才らしいじゃないか」

どうやらドラゴンはおろかクロまでも凄い存在だった様だ。ちょっと凄い猫程度の扱いしかしてなかったけど、大丈夫だったんだろうか。

ところで、このドラゴンの人型の姿。何処かで見た事がある気がするな・・・何処だったか。

第11話

『まさか賢風竜シエルウィーズがこんな所に現れるとはな』
「俺もまさか噂の天才に会えるとは思わなかったぞ。クロムディルスパーダ・・・だったか？」
『クロと呼んで欲しい。そっちの方に慣れてしまったからな』
「そうかい」

クロムなんちゃらというのはクロの正式名称の事だ。長くてあまり覚えようと思えないのでクロと呼んでいるが、どうやらクロ自身もクロと呼ばれる事に慣れてしまった様だ。
なにせ村にいる他の動物からもクロと呼ばれているくらいなのだから仕方が無いだろう。それにクロの方が猫っぽい名前で可愛い。

それはさておき、どうやらこのシエル何とかというドラゴンは有名な存在らしい。賢風竜という呼ばれ方からすると、恐らく有名な上にかなりの大物で強いのではないだろうか。
そんな存在が何故こんな辺鄙な田舎に来たのだろうか。しかも生贄と称して村有数の美人でもある村長の孫娘を要求するとは、やはり賢風竜と呼ばれども性欲・・・食欲？には勝てないのだろうか。
前世では竜だったか龍だったか忘れたが、多淫だと聞いた事もあった。割とありえない話でも無いだろう。

「そっちの君は・・・精霊、では無いが人間でも・・・何なんだ彼女は？よくわからん」
『あ、私は不思議な力で分身を作って活動しているただの人間です』
『ちなみに実年齢1歳だ』
「は？」
「え？」

シエル何とか・・・シエルでいいか。シエルが私の実年齢を聞いて口を開けたままポカーンという擬音が聞こえそうな顔で私を凝視している。
ちなみにずっとシエルに抱きついて話を聞いていた村長の孫娘も同じ様に口を開いたまま呆然としている。二人とも美形なので、間抜け面の筈なのにそういった印象を感じない。
・・・ん？孫娘は何故クロの言葉が聞き取れたんだ？統一言語で話しているから普通の人間には聞き取れない筈なんだが・・・まさか統一言語を聞き取れる特殊な人間なのだろうか。
しかし今まで村では私達の会話を聞き取っていた様子は無かった。という事は、シエルが何かをしているのだろうか。賢風竜と呼ばれているくらいなのだから、それくらいは魔法を使って何とか出来そうな気もする。

「いやクロムディルスパーダ、それは流石におかしいだろう。1歳で統一言語とはいえここまで流暢に会話出来る人間は普通は居ない」
『クロでいいと言っているだろうに。それにこいつは普通じゃない人間だからな。そっちの娘ならばレフィアを知っているだろう？』
「え・・・レフィア！？貴女レフィアだったの！？」
『はい。この姿は大体12歳くらいになった私の姿ですね』
「はぁ、えぇ～・・・なんていうか、人間とは思えないくらい可愛いわね。てっきり精霊かと思ったけど・・・」

自分でもかなり可愛いとは思っていたが、どうやら人間とは思えないくらいの容姿だったらしい。それにしても精霊とは・・・精霊は見目麗しいという常識でもあるのだろうか。クロは精霊じゃないと看破していたので違うかもしれないが。
しかし孫娘は何故こんなにも落ち着いているのだろか。自分を攫う筈のシエルに抱きついたまま離れようともせずに居るし。

『あの、何で自分を攫うドラゴンさんに抱きついたままなんですか？あと統一言語も聞こえているみたいですし』
「ん？ああ・・・レイカ、彼女達なら詳しく説明してもいいと思うが、どうだ？」
「ええ、大丈夫よシエル。それにもうここまで来たらバレても問題ないもの」

この会話で何となく真相が理解出来てしまった。が、一応詳しい説明を聞いておこうと思う。

まず二人が出合ったのは、シエルが人型になって冒険者の真似事をしながら人の目線で旅をしていた時に村に訪れた時の事。長閑で村人全員に活力のあるこの村が気に入ったシエルは、暫く村に滞在しようと宿で部屋を借りようとしたらしい。
そして宿へと向かう途中に、少々酒に酔ってしまっていた冒険者が女性にしつこく迫っているのを発見。その酔っ払いを気絶させて女性を助けたそうだ。
その女性が村長の孫娘ことレイカで、なんとシエルはレイカに一目惚れしてしまった。そしてレイカもシエルに助けられた事もあり一目惚れしたという。
それからは暫く村に滞在して二人は交流を深め、シエルが旅を再開しても頻繁に村を訪れながら、少しずつ愛を育んでいったらしい。青春である。

そんな時にろくでもない貴族がレイカを見初めてしまい、しかもその貴族がそれなりの権力を持っている家柄だったせいで婚約を強制されてしまう。
村長である祖父と父は娘が貴族の嫁になるという事でいい生活が出来ると考え、更にその繋がりから村にも良い事があるという事で

乗り気だった。ちなみに母親はレイカがシエルを好いている事を知っていたので反対していたらしい。
そんな状況でレイカは絶望してしまいそうになったが、そこで母親はレイカにこう言ったらしい。

「駆け落ちしてしまいなさい！私が許すわ！」

シエルと交流を重ねている中でシエルの正体を知っていたレイカは、ならば絶対に捜索されない様な方法で駆け落ちしようとシエルと共に画策。
その結果、古来から稀にあるという「魔獣が生贄を求める」という事柄を利用してこの人騒がせな駆け落ちを実行したらしい。
勿論母親は知っているしレイカも当事者なので、二人は嘘泣きと悲壮感を感じさせる演技で騙し続けていたらしい。女は女優というが、全く恐ろしいものだ。今は私も女なのだが。

「とまぁ、そういう訳なのよ。統一言語に関しては私は知らないから、シエルが何かしてくれたんでしょ？」
「ああ、レイカが置いてけぼりにならない様に意思疎通の魔法を利用してね。これならレイカも話がわからないなんて事は無いだろう？」
「シエル・・・」
「レイカ・・・」

二人の世界に突入したのを見て、私は今すぐエーテル体を消して本体に意識を戻し眠りたくなった。しかしそんな事をすると放置したクロに怒られそうなので我慢する。

『つまり、私達が心配してここまで来た意味は無かったんだね』
『そうなるな。まあ暇つぶしにはなったくらいか』

未だ二人は見つめ合って何やら愛を囁きあっているので、暫くはクロを撫でながらのんびりと空でも眺める事にする。

ああ、実に良い天気だ・・・

その後、特筆する様な会話も出来事も無く、ドラゴンに変化したシエルにレイカが乗って空へと飛び立っていった。私とクロはただ疲れただけだった。

私が東の山に来る事を決めてクロを付き合わせたので何だか申し訳無くなってしまい、村に帰る前にクロへのお詫び代わりに神様的パワーを使って美味しい本マグロを作り出してクロと一緒に食べたのだった。

クロは初めてマグロを食べたらしく、非常に満足そうにしていた事が、今回の出来事で一番良かった事かもしれない。なんともしっくりこない結果に終わってしまったものだ。

とりあえず今日は早めに寝て気持ちを切り替えようと思う。

第11話（後書き）

いえーいしっくり来ない終わり方いえーい

第１２話（前書き）

いえーいちょっと飽きて（ｒｙ
もう一つ何か事件起こそうかと思ったけど、そろそろ新しい展開を求めようと思う。
という事で繋ぎ。

第１２話

何ともしっくり来ない魔竜事件からそれなりの時が流れ、私は３歳になった。

３歳という事で当然の様に、とはいえ舌足らずではあるが言葉が話せる様になった。まだまだ聞きなれない単語は意味がわからないものの、そのつど両親やクロに聞いているので中々語学力が上昇している筈だ。

そして本体でも統一言語が使えるので、エーテル体を使わずとも人間や動物など全ての知的生物と会話が出来る様になった。そして、そこで初めて気が付いた問題も存在していた。

それはとある日、統一言語を用いてクロと会話していた時の事だった。

『やっぱり魚は塩焼きが一番だよ。あの素材の味を活かした塩っ気がたまらないね』

『いや、何もつけない素焼きこそ最高だ。尤も猫舌だから熱いままだと食う事が出来ないがな』

『素焼きもいいけど、おかずにするならやっぱり塩味が無いとね』

『俺には人間の味付けは少々濃すぎるからな・・・』

初めて本体で村を散歩していた日、村の中央にある巨大水晶の台座に腰掛け、本日の議題『美味しい魚の食べ方』についてクロと議論を交わしてた時だった。

何だかやけに視線を感じると思い周囲を見渡すと、大人達が何やら微笑ましいものを見る様な瞳で私とクロを見つめていたのだ。

今この村には小さい子供は私しか居ないという状況なので、それ

もあって子供を見てほのぼのしているのだろうかと思ったのだが・・・どうやら少し違う様に見える。
ならば一体何故なのかと考えるものの、私にはまるで思いつかなかった。

『ねぇクロ。何でこんなに生暖かい目で見られてるかわかる？』
『気付いてなかったのか？』
『え？』
『俺と統一言語で会話している時、お前もニャーニャー言ってるぞ』
「・・・・え？」

・・・そう言えば初めてクロと会った時も、統一言語と同時に副音声の様に聞こえた猫の鳴き声が気になっていた。今ではすっかり気にしていなかったのだが、まさか私もニャーニャー言っていたとは思わなかった。
という事はつまり、周囲から見ると、可愛らしい幼女が猫とニャーニャー言い合っている光景が目に映っている事だろう。・・・きっとそんな光景を見ると私もほんわかとした気持ちになる。
若干恥ずかしいものの、まだまだ幼い子供なので問題は無いだろうと今は気にしない事にした。将来的には何とかしなければいけないだろうが。

さて、言葉は勿論運動能力も上がったので一人で散歩も行ける様になった。
勿論村の外には魔物が居るので出る事は許されていないが、村の中ならば危険がありそうな場所に近づかなければ許されているのであちこち動き回っている。
以前からエーテル体で行動していたので何処に何があるのか熟知

しているのだが、やはり自分の体で動き回るのは物事の感じ方が違う。初めて本体でクロを撫で回した時はやはりエーテル体とは感じるのとは違ったものがあった。
それ以来私は昼間はひたすら外で遊び回り、夜は本を読んでもらったり自分で読んだりとまさしく子供の様な生活を送っている。
尤も普通の子供の生活とは少々違うが。

『かくれんぼしよー！』
『クロもクロもー！』
『流石に小鳥相手にかくれんぼはちょっと不利なんだけど・・・』
『隠れる場所に制限をつければよかろう』

そう、小さい子供が私しか居ないので、必然的に遊ぶ相手は動物達になってしまうのだ。そんな生活を送っているせいか、私が統一言語を使えると知らない大人達は私をまるで動物使いの様に扱っていたりする。
私は何処の野生児だと突っ込みたくなってしまうが、実際動物使いと化しているので反論がまるで出来ない。というかニャーニャー言いながら村を駆け巡るのは正直どうなのだろうかと思ってしまう。止めはしないのだが。

ちなみに、小さい子供が私以外に居ないのは理由がある。過疎化が進んでいるのもあるが、この国では年齢が１２歳になると王都にある学校へ通う事になるのだ。
王都に家がある子供以外は寮に入る事になるので村には１２歳から１５歳までの子供が全然居ない。１５歳になると義務教育が終わるので、その後は実家に帰るか更に進学するか選ぶらしいが、詳しい事はまだ知らない。
ともかくそんな二つの理由で、この村には子供が全然居ないのだ。最近若い新婚夫婦が村に誕生したので来年当たりに子供が生まれる

可能性はあるが、同年代の子供は望めないだろう。

さて、そんな私の両親だが、やはり子煩悩というか親バカというかデレデレだった。

母親は可愛い可愛いと連呼しながら私に自作の猫をモチーフにしたブローチ型の魔法具をプレゼントしてくれたり、そしてそれに篭められた魔法がかなり強い防壁系のものだったり。

父親は相も変わらずワイルドキャラに合わない程にデレデレな顔で頭を撫でてくれたり抱き上げてくれたりする。以前ほお擦りされた時にヒゲが痛いと言って以来毎日しっかりとヒゲを剃る様にしたらしく、今は以前よりもワイルドさが薄くなっていたりする。

過剰な程に愛情を注がれているが、子供故か、もしくは大人の精神がある故にこの愛が貴重なものだと理解しているからなのか、非常に幸せを感じている。

このまま当分は平和が続く事を祈りたい。そして早く6歳になって魔力を解放して魔法の練習をしてみたいものだ。

第１３話（前書き）

連続更新はあっという間に途絶えました。
別に連続更新を続けるつもりは無かったんで問題ないんですけどね。
基本的に気分で書いてますし。

第１３話

６歳になった。とうとう魔力を解放して魔法の練習が出来る年齢になったのだ。
魔力の解放には王都にある協会と呼ばれる施設に行かなければならないらしいが、６歳になると協会に行くの義務らしいので行かないなんて事は無いだろう。
・・・誕生日を迎えてからすぐに行く訳では無いらしいので、いつ王都へ向かうのかワクワクしながら毎日を過ごしている訳なんだが。

そして誕生日を迎えてから一ヶ月程経ったある日、家族全員（いつの間にか飼い猫になっていたクロ含む）で朝食を食べている時、お父さんが突如言い放った。

「王都に行く事になる」

ようやく協会に行けるのかと嬉しくなったが、その喜びを表に出す前に停止する。お父さんの言い方を聞くに、どうやら協会に行く事とは別で何かある様だ。
それが気になったので大人しく食事をしながら続きを待つ事にすると、どうやら引越しになるらしい。そのまま両親は会話を続ける。

どうやらお父さんが見習い鍛冶師だった頃に世話になった人が引退する事にしたらしく、その鍛冶場の後継に、弟子の中で一番優秀だったお父さんを選んだらしい。
別に断ってこのまま村に住んでいても問題無いらしいが、お父さんもかつての恩師に選ばれた事と、ついでに様々な客からこんな辺境ではなく王都に来て欲しいと言われていたので引き受ける事にし

たらしい。
　というか、私が見ている限りでもかなり強そうな冒険者や有名らしい騎士が剣の鍛造や修復の依頼に来ていて、何でこんな辺鄙な村で仕事をしていたのか不思議に思っていたくらいだ。恐らく今回の引越しでようやく腕に見合った工房を得られるという事なのだろう。

「とはいえ、お前達がここに住みたいと言うならば俺もここに残るつもりだがな」
「何言ってるのよ。確かにこの村から離れるのは少し寂しいけれど、着いていくわよ？」
「私もね」

　とりあえず王都がどんな感じか全くわからないが、とりあえず空気は読んで賛成しておく。ここで私がぐずっても良い事は特に無いだろう。

「そうか・・・わかった。なら明日からここの工房を弟子達に渡す準備に入る」
「ええ。なら私は村の皆にお別れの挨拶かしら？」

　私も何かする事があるだろうかと考えてみるものの、せいぜい動物達にお別れするぐらいしかやる事が無かった。人間の友達が居ないおかげで楽で仕方が無い。ああ、仕方が無い・・・

「そうだ、クロも着いてくるよね？」
『仕方が無いから着いていってやるさ』

　可愛い奴だ。

朝食を食べ終えた後、近い内に王都に引っ越す事を動物達に伝える為に村の中央へ来た。
結局この巨大な水晶が何なのかはわからなかったが、ここまで来ると誰かに聞くのも何となく気が引けるので無視する事にした。こんなものはただのオブジェ扱いで問題ない。

広場に来ると、頻繁に私の元に遊びに来る小鳥が飛んできて私の右肩に着地した。この子はかなりの甘えん坊で、毎日顔を合わせる度に頭を撫でて欲しいとおねだりしてくる。
今日もそれは同じだったらしく、おねだりされるがまま指先で優しく頭を撫で回す。この子もクロ程ではないが中々良い感触の頭を持っているので撫でる方も気持ちが良い。
そのまま巨大水晶の台座に座り、膝の上に乗ってきたクロも同時に撫で回しながら引越しの事を小鳥に伝えた。

『・・・』
『・・・聞いてる？近い内に引っ越しちゃうからもうすぐお別れなんだけど・・・』
『・・・あ、あわわわわわばばばば』
『うわっ何が起きた！？』

私が引越しの事を伝えた事で何かが起きたのか、右肩の飢えに乗っている小鳥が器用にも全身をガタガタと震えさせ始めた。
よくわからないものの普通の状態じゃないのは明らかなので、手のひらに乗せて様子を見ようとするが、寸前で小鳥が私の肩から飛び立った。
『たたた、大変だよー！レフィアが引っ越しちゃうよー！？』

かなりの広範囲まで聞こえる統一言語で叫びながら、村中を猛スピードで暴走飛行し始めた。

「これは・・・何となくこの後の展開が読めた」
『だろうな』
「ちょっと待ってクロ！何でそんなに離れてるの！？」
『この後の展開が読めたからだ』

テクテクと歩きながら私から離れていくクロ。そしてその向こうからは、小鳥の絶叫を聞いてこちらに向かっていると思われる動物達の集団。
村中、または村の周辺に居る動物の殆どが村中央の広場に向かって来ている様で、大人達がギョッとしているのが目に入る。が、私は押し寄せる動物の集団のせいで大人達の事を気にする事が出来なかった。

『レフィア引越しって本当か！？』
『嘘だよね？嘘だよね！？』
『そんな・・・馬鹿な・・・！？』
『レフィアお姉ちゃんいなくなっちゃうの！？』
『な、何という事でしょうか！！こんな事が・・・！！』
『俺の癒しが居なくなっちまうだとー！？』

わんわんにゃーにゃーきゅるきゅるぴぃぴぃちゅんちゅんぐるぐるくーくーぴゅいぴゅい。
皆が皆同時に叫ぶので最早鳴き声がただの騒音にしか聞こえず、しかし統一言語は相手に直接意思を送る会話方法なので皆の言葉が一気に頭に入ってきて頭が痛くなってきた。
しかし動物達はそんな私の事に気付かない様で、鳴き声は止まずに驚愕や嘆きを叫んだりしている。おかげで頭痛が酷い・・・まさ

か統一言語にこんな欠点があるとは思わなかった。
脳の処理速度が上がったらこの溢れかえらんばかりの声も無事に処理出来るのかも知れないが、少なくとも私はいきなり急成長する様な才能を持っていないので不可能だろう。
何とか止めてくれる様に説得したいものの、頭痛が原因で上手く声を発する事が出来ない。つまりは打つ手がまるで無いという事だ。

『静まらんか貴様等！レフィアが処理しきれとらんだろうが！』

まさかこんな事で倒れてしまうのだろうか。そう考えながら半ば諦めていた私だったが、そろそろ限界という辺りでクロが一喝してくれたおかげで、何とか動物達が大人しくなってくれた。
本当に危なかった・・・頭の中に響いていた声の余韻で未だ頭痛は完全には止んでいないものの、この程度なら多少耐えたならすぐに治まるだろう。
しかしかなり辛かったので肉体的にも精神的にも疲労が溜まっており、まだ朝だというのに全身汗だくになってしまっている。
一旦帰宅して汗を流したい・・・せめて汗を拭いて着替えたい・・・

「クロ～、ちょっと汗だくになっちゃって気持ち悪いから着替えてくるね～・・・」
『ああ、わかった。俺はこいつらに説明と説教をしておこう』

私はクロの好意に甘えて一旦帰宅する事にした。まだ朝だというのに。

第１３話（後書き）

未だ魔法に辿り着かない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6852s/

異世界に転生する話

2011年5月31日21時13分発行